

二葉亭遺族の其の後

高等學校の土手に沿うて砂ほこりの道を曲つてから、彼れこれ半時間にもなる。向ヶ丘彌生町の三番地とだけ聞いて來たので、かう同じ番地が幾つもあつてそれがイの何番口の何番と分れてゐられては、實際まごついてうんざりしてしまふ。初めのうちは知れたものと思つて方っぱしから一々表札を見て歩いて居たが、いく度歩いても訪ねる長谷川といふ字に似よつたのすら見當らない。しまひには口惜しくなつてたゞ無暗に歩いた。向ふから三人揃つて來る學生の、湯歸りの手に石鹼箱の光るのを見ながら、櫻か何かの樹立の繁みの道について外れると。地べたに生えたやうな格好をして居た烏が、驚いたやうにバサバサと飛びあがつて、朽ちた冠木門の屋根の上からカアカアと下をのぞいて居る。小猫の腐つたのを何處からか見つけて來て啄んで居たのだ。恰度そこに來合した郵便やに、『若しやこの邊に長谷川さんといふ家はありませんでせうか』と駄目とは思ひながら聞いて見る。

『長谷川さん……えゝと長谷川何といふんですか』

『さア、多分女名前になつてゐるだらうと思ふんですがねえ。主人は亡くなつたんですから』

『あ、あの家なら疾うに越した筈ですよ、何でせう、旦那さんは新聞社か何かに出てゝ、そして露西亞へ行つて死んだ人でせう』

『えゝえゝ』と私は思はず大きく頷いた。

『あの家ならなんでも疾うに越しましたよ、とも角もこの道を眞つ直ぐ行くと左手に青木つていふ家があるから其家で聞いてごらんさい、そこは差配ですから』と郵便屋は左に寄り右に寄つては門々の郵便受箱に手紙を投げ入れながら親切に教へてくれた。

『あの人は何でせう、小説家だったのでせう』などゝ意外なことも知つて居た。

『御免下さい』と差配の格子戸の前に立つと、返事がしてやがて前掛けをしめた背の低い男が出て來た。

『ね、長谷川さんは越しましたね』と奥の女の聲に言葉をかけて、

『二葉亭さんか——』と私の姿を見下して獨ごと。

『いつ頃お越しになったのでございませう』といふと、

『さうですね……えゝと七月の卅一日に越したやうに此帳にはついてますがね』とわざわざ罫紙綴ぢの帳面を持って出て繰って見る。玄關の脇の壁には赤や青の色で彩った差配地の繪圖面が掛かつて居た。

せめてもとの其お住居を一目と思つて道順を教へて貰つて來て見ると、先刻やはり尋ね廻つて一度歩いた道である。櫻井女塾の裏門と並んだ人力車屋に寄つて、かうかういふ家は……と聞いて見ると、

『あゝそれなら直ぐ向ひの家がさうでさア』と一人が障子を開けて講釋本か何かを持った體を反らして私を見た。

『それそこに着物が干さつてゐる家があるでせう、其家に住んでたんでさア』

指された方を振りかへつて見ると、同じやうに續いた板塀の三軒の眞中に、二階屋の一棟が白く乾いた道にのぞんで居る。其二階の欄干には男の着物が二枚ばかり、花色紺の裏を見せて日光を浴びて居た。

次の日は二葉亭未亡人の現住所なる板橋行となる。

遊郭などのちらほら見える板橋の町の末に來て、とある小間物店に寄つて聞くと、内儀さんはぱたぱた驅け出して二軒隣の氷屋に行つて聞いて來て呉れた。恰度御近所の人が居合して教へてくれたといふ。床屋と葉茶屋の間の細い道を敷石傳へに行くと、畑を頼して建てたらしい新しい家々の後に、まだ一二軒大工の入つて居る家がある。

大久保や代々木邊ともまた趣の違つて靜かな郊外の、木の目の赤い新しい塀と塀の間の黒い土の道を行くと、畑につき當つて一寸まごつく。でその家の庭へはいつて、座敷の方の縁から、

『少々伺ひますが……』と恐る恐る奥の方を覗いて見る。若い男が出て來た。

『直ぐ隣りは長谷川さんていふんですが、男の書生ばかり三人して居るんですよ』と言はれて少し困つたところへ、

『長谷川さんですか、教へてあげませう』と畑の前で機械の車見たいなものを廻して居た襦はだき衣とズボン下一つの男が寄つて來た。

『旦那がなくて子供と奥さんばかりの家でせう。油屋の娘でそして耶蘇の先生か何かの：でせう』と男は家の裏に廻って畑のふちに私を導いた。

『あの今人のはいった家が長谷川さんですよ』

近づいて見ると大掃除か何か家の前に一ぱいの荷物が出て居る。門の前に出した荷によりかゝって居た五ツ六ツばかりの男の子をちらと見て、寫眞でお目にかゝたつ二葉亭氏の面影を見出さうと思つたが、足はもう其時長谷川柳子と表札の出た門にはいつて居た。玄關にも庭にもさまざまな道具などが持ち出されて、家の中に人の聲がする。玄關に腰を下して煙草を吸って居た爺さんが、

『お客ですよ』と言って慌てゝそこを退いた。

『二葉亭先生のお宅はこちらでございませうか』と洋傘をついて首をかしげると、

『さやうでございます』と呼ばれて出ていらした奥様が襷をお外しになる。思つたよりもお若い方だったので、其時一寸お妹さんか知らと何がなしに思つた。

『何誰でございませうか、今日越さうと思つてたところなのでございますよ』と奥様は洗濯の届いた飛白のお單衣の膝をきちんとそこにお坐りになる。玄關に出て居た本箱に洋傘をたてかけて帶の間から名刺を出すと、

『まア折角いらして下さつたのに生憎こんなに取り散らして置まして……』と氣の毒さうに、

『お上り下さいって申上げたいんですけどもこの通りのなんですから……眞實に失禮でございませう』とさまざまなのが散つたあたりを見廻しながら、

『は、やはり板橋でございませう、停車場の直ぐ近くでございませう、親戚が近くでございませうものですから……生家は妹が……あゝあの母でございませうか、母はやはり千駄木の方に居りますが、長男はこの節病氣なものですから鎌倉にまゐつて居ります。こちらは七つと五つになる子供を相手にして、いゝえ何處へも別段勉めては居りませんでございませう。生家が近くでございませうからその傍の方に越してそのうちに家でも一軒建てゝ貰はうと思ひまして……まア何でございませうね、折角遠いところをいらして下すつたのに生憎な折で失禮いたします』

『先達でも内田さんがわざわざいらして下さったのに恰度留守にいたしまして誠に失禮いたしました。は、坪内さんや何かも御尋ね下さることがございますが、遠いんでございますからお氣の毒に思ひましてなるべくお斷り申すやうにして居ります』

靜かな奥様の言葉を破って、

『オイ其端をこつちへこつちへ』と先刻の爺さんが若い者を相手に荷車につけた戸棚に細引を掛けて居る。

ふと忙しいのにと氣がつくと慌てたやうにお邪魔した詫を言つて暇を告げる。

『眞實に失禮いたしました。今度越しましたらどうぞまたいらして下さいまし、停車場の直ぐ近くでございますから』と再び氣の毒さうにかう仰有る。私もお氣の毒になって心からお邪魔した詫を言つてそこを辭した。

町に出ると私の後から板橋行と掲げた乗合馬車が、茶色の覆ひを垂れて御者の鞭に勢ひよく驅けて廻った。

昨日は本郷の森川町の通りであれを見た。

奥様も昨年の七月には頑是ない二人の御實子連れて、あの馬車に揺られてこの町にいらしたのではないか知らなごふとこんなことを思った。

底本…「水野仙子全集」第五卷

初出…「文章世界」第十三卷第六号 明治四十三年六月

テキスト入力…小林 徹

公開…令和六年一月一日

[リンク…水野仙子「作品年譜」](#)

[水野仙子ホームページ](#)